
シュガーなエブリディ

蒼井ぴあの

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シュガーなエブリデイ

【Nコード】

N0733C

【作者名】

蒼井ぴあの

【あらすじ】

恋愛によって一步前に進む姿を描く、男女7人の重ならない恋の物語。”短篇集”です。

憂鬱な月曜日（前書き）

毎日更新致します。

憂鬱な月曜日

また今日から一週間が始まる。

月曜日は嫌い。

雨の月曜日はもっと嫌い。

あの人に逢ってしまうから。

あの人は水色のビニル傘で歩いているから。

そして必ず横に誰かいるから。

月曜日の朝まず一番はじめにすることはカーテンを開けて空を確かめること。

そしてひとつ大きく溜め息。

私の願いを嘲笑うかのように、そらから大粒の雫。

それでも私はいつもと変わらないように学校に行く支度をする。

いつもと同じ時間に家を出る。

いつもと同じ駅への道に行く。

いつもと違い、傘を片手で差して。

私の昼ご飯はコンビニで買う。

サラダとメロンパンとミルクティー。

いつもと同じトーンがおかしい声の店員にお金を払い、店を出る。

8時10分程度前。

入り口で傘立てに差した傘を引き抜き、傘を空に向かって開く。

丁度、目の前に現れる。

水色の傘を差したあの人と、あの人に肩を抱かれた女の人。

私のことは見向きもせずに通り過ぎる。

当たり前だ。

だってあの人は私のこと知らないもの。

雨の日に逢う女子高生程度。

いや、それ以下の風景の一部か。

彼に見えている世界は、雨と水色の傘と、
いつも隣にいる違う女の人くらい。

だから、雨の月曜日は憂鬱だ。

私は風景でしかないから。

どうでもいいことだけど。

「それは、好きって言うんじゃない？」

憂鬱な私に興味を持った隣の席のヤツが聞いてきたので話したら、そんなこと言ってきた。

「は？何で知りもしない人のことを好きになるのよ。」

やっぱり話すんじゃないかなかったって後悔した。

口に出してしまったら、それが事実になるから。
私の想いが形をなしてしまうから。

「一目惚れだね。いいねーせいしゅんだ！」

私は隣で騒ぐヤツを無視して、机に突っ伏した。

一目惚れ？

そんなんじゃない。

そんなんじゃない…

「でも見てるだけじゃ何も変わらないよ。」

口は人に伝えるためにあるんだから。話してみたら？」

尚もヤツは私を追い込みたいらしく、隣でペラペラ喋っていた。

月曜日の雨の日しか逢わないって言ったのに、どうやって伝えるんだよ。

しかもいつも違う女の人連れてるのに、どう話しかけるんだよ。ヤツに言っても仕方ないので、心の中で呟く。

午後は打って変わっての晴天だった。

雨上がりの午後は水分を含んだ風が頬をなで上げる。

こみ上げる気持ち悪さで、尚も憂鬱は続く。

私はいつもの道を通って帰りたくなかった。

ヤツに話してしまった後悔が胸の中で渦巻きそうだったから。

遠回りになるが迂回経路を選ぶ。

いつもと違う道は気持ちを晴れやかにする。

片手に持った傘を振り回し、空を見上げながら歩く。

「月曜日の雨の日の朝はいつもあなたを見ていました。

水色の傘と、いつも違う女の人。

それでも私はあなたが気になっていました!」

一人で口に出して満足した。

私は幸せな気分で前に歩く人たちを追い越して、家路を急いだ。

憂鬱な月曜日がまた訪れたら、きちんと伝えよう。
あなたが気になっていることを。

唐突な火曜日

「月曜日の雨の日の朝はいつもあなたを見ていました。水色の傘と、いつも違う女の人。それでも私はあなたが気になっていました！」

後ろから突然聞こえた声に驚いた。

まるで自分だ。

自分のことを言っているような気がした。

月曜の朝は授業が必修だからサボれない。

しかも雨が降るとバイクに乗れないから歩きだ。

：日曜の夜は淋しいからつい誰かに頼ってしまう。

水色の傘は……アイツがくれた唯一のモノ。

俺が驚くまもなく、横を女子高生が走り去っていった。顔すらわかんなかったし。

もし、

もしも俺だったら…

やっぱり考えるのはよそう。

清々しく走り去った女子高生を思うと、眩しすぎてクラクラした。

羨ましいな。

あんな風に人を想えて。あんな風な子に愛される人がいるなんて。

いつからだろうか、こんなに道を踏み外してしまったのは。

気持ちを押し殺して、遊び呆ける癖がついた。

そうすると何も考えなくていいんだ。

何も想わなくていいんだ。

時計の針は刻々と進み、気が付いたら俺はまだあの女子高生が通り過ぎて行った場所に突っ立っていた。

虚しさだけがこみ上げてきた。

携帯を手に取り、適当な女の名前を探してアドレスを見ていた。

誰か、誰か、この乾いた自分に水を与えてください。

たまたま一番上に名前があった女に電話をかけた。

「突然どうしたのお？」

甘ったるい声が脳みそを麻痺させる。

「なんとなく。今から行ってもいい？」

「当たり前っ♪」

じゃあすぐ来てねえ！すぐよ！」

簡単に約束を取り付ける。

俺は水を得ることができた。

できたはずだった。

次の日女の家から帰る途中、昨日と同じ道。

また昨日の女子高生を思い出す。

なぜだろう？

自分のことを言っている気がしたから？

違う。

自分にはできないことをしていたからだ。

想いを口にすると言うことを彼女がしていたからだ。

走り去った彼女の姿を思い出した。

俺にもできるだろうか。

もう一度、想いを伝えてもいいのだろうか。

もう一度、あちら側の世界に戻れるだろうか。

俺は今来た駅からの道を、また戻る。

電車に乗りアイツの元に向かう。

無計画で唐突だ。

それでも、アイツに言わなければ。

アイツん家のマンションの前でアイツを待つ。

遠くからアイツが歩いてくるのが見えた。

すぐに分かってしまう自分は、どうしようもなくて苦笑いが出る。

伝えてもいいか？

ずっと前から好きだったって。

邪な水曜日

また見てしまった。

あの男が女と歩いている所を。

しかも腰に手を回し、ラブホの前を歩いている所を。

今回は確定でいいと思う。

絶対に他の女がいるって。

ショックでフラフラになりながら家路を辿る。

人間って凄いことに意識なくとも、家までは帰れるみたい。
今日私が証明したわ。

マンションの前まで来ると、懐かしい顔があった。

「あれ？何やってるの？」

元カレだ。いつぶりだろう。

「お前どうした？」

なんかひでえー顔。」

私の質問は無視ですか？

相も変わらずね。

そんなことを腹の中では思いながらも、私の気持ちをすぐ察してくれたことに嬉しくなり、涙が零れる。

いや、涙の洪水が引き起こる。

「うわーん！！！」

泣き出した私に驚き、ギョツとしたあと頭を撫でてくれる。
私はその優しさに決壊したダムのように泣き喚く。

「と、とりあえず何があったか言えよ。
ここじゃ嫌なら場所変えよう。な？」

私は必死カバンから鍵を取り出し、押し付ける。

「家？上がっているの？」

言葉も出せない私は、コクコクと頷いた。
だって、話を聞いてほしい。

元カレってゆう所はマズいとは思うけど、誰かに話を聞いてほしい。

はあと大きな溜め息が聞こえ、驚いて見上げた。

「分かった。聞いちゃうから。」

久々に男が家に来た気がする。

あの男は家には2回か3回来たけど、最近は全く来ない。
そう思うとまた泣けてきた。

ソファーに座ると真剣な顔で私の顔は覗かれる。

「さて、どうしたん？何があった？」

優しい声が私の部屋に響く。

「浮気、してた。」

彼氏が浮気してた。」

私の言葉に元カレは目を見開いた。

「証拠でも発見したん？」

「女と歩いてた。」

腰に手を回して。

しかも…」

「しかも？」

「ラブホの前を…」

ああという顔を元カレはした。

そりゃアウトだなあと呟く声に、涙がまた土砂降り。

それから何時間経ったのだろう。

私は元カレに、というか元カレという友達でもない微妙な相手にすべてぶちまけた。

頭がガンガンするくらい泣いて、

家にあった酒をすべて飲み尽くして。

ちょうど日付も変わろうという頃に、元カレはふと時計を見やった。時間を確認したあと私を真剣に見つめた。

な、なに？

「今日俺はお前に伝えたいことがあって来たんだけど。俺ね、まだお前のこと好きなわけよ。

で、話聞いてたらチャンスかと思ってたんだけど…」

鳩が豆鉄砲くらったような顔をした私を見て、元カレはニヤリと笑いまた言葉を継いだ。

「聞いてると、まだお前は彼氏のことが大好きで仕方ないみたいだし。

まあ弱みに潰け込むのもどうかと思ったから、今日は帰るわ。」

「え？帰る？」

「これ以上いたら襲うぞ？御希望なら仰せのままに。」

焦って私がたじろいってしまった。それを見て元カレは吹き出した。

それが好きな人に対する態度？馬鹿にされてる？

「もし、お前が辛くて一人で耐えられないなら電話して。そしたら潰け込むから。」

捨て台詞のように、カッコよく元カレは帰って行った。
カッコいいのかは謎だけど。

一人残されるとガランとした部屋で恐くなる。

冷蔵庫のちょっとしたモーターの音すら嘲笑うかのようで、また涙が零れる。

いつそ元カレに泣きついてしまおうか？

大きく空いた心の穴を埋めてもらおうか？

携帯に手を伸ばし、アドレスから元カレの名前を探る。
番号を確認し、通話ボタンを押す。

ワンコールもせずに先程まで聞いていた声が聞こえる。

「何？もう漬け込まれたいの？」

クスクス笑う暖かい声。

だけど、

「さっきはありがとう。

ごめん、やっぱりもう会えない。

アドレスも消して。」

私の口から出た言葉は全く逆の言葉。

一瞬だけ詰まった声の後、また暖かい声が降り注ぐ。

「分かった。

もう会わないし、連絡しない。

今日お前と会えてよかったよ。

じゃあな、電話は俺から切らせて。」

その言葉の後、3秒の間があってから切れた。

「ありがとう。ありがとう。ありが…っ」

届かない私の声が部屋の中でこだまする。

私はそのままあの男に電話する。

リダイヤルで今話した元カレの下にある名前。
着信履歴を埋め尽くす名前。

ねえ私たち別れましょう。

私はその言葉を口にするために。

鈍色な木曜日

今日の空は鈍色だ。

俺のスケジュールは真っ白だ。

「今にも雨が降りそう。
鈍色な空ね。」

「虹色？」

俺の言葉にふわりと笑う彼女。

「馬鹿ねえ。
にびよ。にびいろ。
薄黒い色のことをいうの。」

「へえ。」

そうだ。

鈍色を覚えてくれたのは彼女だった。

俺の中に彼女が染み着いていたことに気付き、なんだか自己嫌悪。
スケジュールが真っ白なのも彼女とのスケジュールを消したらこう
なった。

「私たち別れましょう。」

彼女の言葉は突然だった。
でも原因は俺にある。

ラブホ出た所を目撃された。

なんて失態。

無防備にもほどがあるな。

そんなこんなで昨日水曜日はボーっと過ごした。

だって元々は彼女とランチして、ショッピング付き合って、そのまま家に来て、ディナーを作ってもらい、お泊まりの予定だったのよ。
それがまっさらに。

今日は泊まった彼女を家に送り、仮眠を取って、夜に仕事に予定だったのよ。

うん、まっさら。

逃した魚はでっかいぞってか？

意外と彼女中心で俺の世界が回ってたんだって、痛く実感する今日この頃でございますよ。

女遊びも遊びの範疇で実はかなり彼女を愛しちゃってたのよ。

あっさりフラれたのは、彼女の声が決意したもので、揺るがない強さを感じたから。もう俺からずっと遠くに彼女が進んでいることが滲み出ていたから。

誰かと遊ぶ気にもならず、自分の部屋のDJブースでターンテーブルと睨めっこで時間を潰す。

今日は店で誰も踊れないくらい速い曲を中心に回してやる。
くだらない俺の意地。

店ではバイト君が張り切っていて、ちょっとテンションが下がる。

ごめんね、天の邪鬼で。

「何落ちてんの？」

先輩に声をかけられ顔を上げる。

「いやあなんかバイト君見てたら下がったんですよ。
あと個人的ダメージが。」

俺の最初の言葉にガハハと先輩は笑い、続いた言葉を聞いて肩をポンと叩いた。

「何があつたか知らないが、こうゆう時こそ踏ん張りどころだ。」

先輩は俺が言葉を返す前に、バイト君に呼ばれてブースに行ってしまった。

踏ん張りどころね：

仕事入れるかな。

どうせスケジュールは真っ白だし。

よし！仕事やるぞ！

決意した俺は、テンションの高いバイト君にシフトを出してきてもらい、空いている日は片っ端から埋める。

ハイテンションのまま自分の時間をこなし、絡んでくる客に優しく応対する。

いつもと違う優しい俺に、周りみんなビビっていた。
いつもはどんだけ酷いのよ、俺。

「クールガイな所がカッコいいんですよ。」

バイト君はそんなこと言ってたけど。

まあ、どうでもいいけど。

さあ、バリバリ働くよ？俺。

失恋を糧にステップアップするから！

明け方の鈍色の空に誓う。

ファンキーな金曜日

DJブースには今日もカッコいい姿。

昨日めっちゃめっちゃシフト入れてる横で確認して、あの子に伝えた。

だから来る。

今日もあの子は来るはず。

俺の気分の上がり下がりはあるあの子次第だと最近気付いた。

要するに恋ですね。

惚れちゃってるんです。

でも、さっき言った通りにあの子が来るのは、目的があるわけで。

俺だって女だったなら好きになるよ、あの人のこと。

最初から叶わないんです。

ぐすん。

初めてあの子がこの店に来た時は、もの凄く浮いていた。

こんな夜の街にお嬢様！？ってくらい清楚で、まあ友達に連れられて来たんだろうなって分かりやすいくらいだった。

肩から少し下くらいのストレートな髪。

もちろん色は入れてなくて、だけどちよつと栗色で。

ブルー系のニットのアンサンブルに、ひざ下丈のふんわりスカート。そこからのびる細い脚。

お店に来る客はみんな露出度が高くって、揃って巻き髪で、頭の色も金に近いような子ばかりで、それに慣れていた俺は一種のカルチャーショックを受けた。

俺自身だってお店に溶け込むようなナリだし。

こんな子まだいるんだなあって思いながら、バイトに勤しむ。

まあ、あの子が二度とこんな店（と言っては失礼だが）来るわけないから、気にも留めてなかった。

いや、ここまで観察していれば気にしてるか。

もう会うわけない人に恋しても報われないし、忘れることにしたんだ。

だけど、あの子はまた現れた。

お店の開店準備をいつものようにこなしていると、後ろからトント
ンと肩を叩かれた。

「あい？何すか？」

一応お店用営業スマイルで振り返る。

「あの…まだ開いてないんでしょうか？」

困ったように瞳を揺らしたあの子がいた。

「え？あああと1時間後くらいっすね。」

えらい早く来た客だ。

つつーかお嬢様には早い時間じゃないのか。

「あ…分かりました。ありがとうございます。」

深々と頭を下げ去って行った。

と思ったら振り返った。

様子を眺めていた俺とぼっちり目が合う。
見ていたことがバレる！気まずい…。

彼女は小走りで戻ってきて、俺を見上げる。

「あ、あの、昨日の人って、今日もいますか？」

昨日？えーと…

「あの、DJの人…あ、11時過ぎくらいだったかな。」

「ああ！あの人は今日は休みすよ。」

俺の言葉に明らかに落胆する。

ああそういうことね。

「教えていただき、ありがとうございます。」

またも深々と頭を下げる姿に、俺は戸惑う。

だって今までそんなに丁寧な人に会ったことねーもん。

「来週の！同じ時間ならいますよ！！」

思わず立ち去る背中に向かって叫ぶ。

驚いたあの子は振り返り、微笑んでまたひとつお辞儀。

なんて綺麗なんだろう…

簡単に恋に落ちました。

だから俺はあの人が回しに来る日はテンションが高い。

「お前、毎日ハイテンションなの？」

ってあの人は楽しげに聞いてくるけど。

「今日お前アシやらねえ？」

あの人からの突然の提案。

「いや、マズいつすよ。」

自分、接客のバイトなんで店長に怒られます。」

あの人のアシやりてえー！！！！

不純な動機ではなく、あの人のプレイを間近で見られるなんて機会ない。

「じゃ俺が店長に言うよ。」

お前家とかで回してるんだろ？目指してるんだろ？」

俺、あの人の優しさに涙がでそうです。

ということ、今日はあの人のアシをやることになりました！
緊張と興奮でテンションがさらに上がる俺。

だけど迷惑かけないように、真剣に時間をこなす。

終わった後、燃焼しきった俺は放心状態でカウンターに立っていた。そんなとき、お店の中では絶対話しかけてこないあの子が、今日は突然声をかけてきた。

「今日ブースにいたね。
凄いね。」

お店で声をかけてこないのは、あの人に見られたくないから、たぶん。

どんな心境の変化？
何かあったの？

いいの？俺と話していいの？

俺、頑張ってもいいデスカ？
好きでいてもいいデスカ？

「俺、マジでDJ目指すわ!!」

あの子は微笑んでくれた。

この想い、届けるから！
いつか絶対！

柔らかな土曜日

男なんてみんな馬鹿なんじゃない？

あのバイト君だって

学校の男どもだって

みんな私のことが好きだって気付いてるし。

結局見ているのは外見だけ。

私は清楚なお嬢様でもなんでもないし、

本当は住んでいる所だって、一軒家でもないただのアパート。

父は普通のサラリーマンだし、たまたま母の体調の問題で一人っ子
なだけ。

別に一軒家に住んでいるなんて言ったことないし、お嬢様ですとも
言っていない。

勝手にみんなが勘違いしているだけ。

私はごく普通に憧れて、ごく普通に恋をしただけなのに

なぜ報われないの？

あの人は付き合っていた彼女がいたことは知っているし、意外と真

剣に好きだったことも分かっている。

私はただの暇つぶしに遊んでもらっただけ。

あわよくばいつか振り向いてもらえればいいと思っていただけ。

その小さな願いすら打ち消すのですか？

「お前とはもう遊ばない。

お前とはってゆうのはおかしいか。

俺、しばらく女遊びしないで仕事に打ち込もうと思うんだ。」

突然、というか初めてあの人からかかってきた電話内容がこれ。

「ちょっと…どういうこと？

え？待って？」

私のパニックは当たり前前だと思う。

「あー…

んーとな、彼女とは別れた。

この前の見られてたらしい。

んで、しばらく仕事に打ち込みたいなと思って。

適当な人間関係はやめようって決めたんだ。」

なんて勝手な人間。

ひどすぎるのは分かってるけど、どうしても憎むことはできない。

前日にバイト君が言ってたから、クラブに会いに行ったら、見向きもされない。

ちよっと自分の情けなさに笑えてくる。

思わずそこにいた放心状態のバイト君に愛想を振って帰る。

だって、もう来ないから。

滑稽な自分の姿に情けなさすぎて、涙さえ出てきてくれない。
家なんか帰りたくない。

このまま誰か連れ去ってよ。

そう願う日に限って、ナンパもされずトボトボと帰る。
玄関の前まで来た時に思わぬ声がかかる。

「こんな時間に何やってんの？」

あの人かと思って、思いたくて顔を上げると隣の家の高校生。

隣の家は5人兄弟。

まあ我が家の生活水準もそのくらい。

現れるなら軟派でイケメンの長男にしてくれればいいのに、
現実目の前にいるのは、お調子者の次男。

「夜中に高校生が出歩いちゃだめじゃないの？」

私の素を知る隣人だから、声のトーンもいつもより低めでいい。

「それ言ったら女性が夜中に一人で出歩いちゃだめなんじゃない？」

そいつはニヤニヤと笑う。

「良いのよ、私は別に。」

ぶっきらぼうに返して帰ろうと思ったら、前に立ちふさがりやがる。

「通してよ！帰れないじゃない。」

イライラをすべてぶつけてやろうと、大きめの声を上げる。

「泣きたいなら、泣きやあいいじゃん。」

話くらいは聞いてやれるよ？」

なんで私が隣の家の高校生なんかと話さなきゃいけないわけ？

なんで私の気持ちかわかるわけ？

なんで：

こいつは私のこと見抜いた？

外見以外を見ってくれる人？

「ありがとう。大丈夫。」

私は笑って家に入る。

そいつは面食らってたが、私の表情を見たら安心したようだ。

「辛かったら言えよ。

マジで聞くことくらいはできるから。」

私の背中に話しかけ、自分の家に戻って行った。

もしかしたら、私の本質を見抜いてくれるのは案外あいつかもしれない。

ときめきとか激しい恋とかじゃないかもしれないけど、穏やかな愛を育むことができるかもしれない。

そう思ってもいいですか？

携帯を眺めるともう日付はどうに越していた。
だけど新規メールを作成する。

” さっきはありがとう。

元気になった。また今度話を聞いて。

おやすみなさい。”

恥ずかしくて絵文字は全く使えずに送る。

隣の家だけど。

柔らかな土曜日（後書き）

明日でおしまいです。

身勝手な日曜日

俺の周りはどうしてみんな幸せそうな顔の奴が増えたのかな？

誰か分けてくれたっていいじゃない。

夜中に隣の家のエセお嬢に会って、泣きそうな顔がカノジョを思い出してしまい話を聞いてあげると言った。

あの雨の月曜のカノジョに。

そしたら土曜日はエセお嬢に捕まり、全部話を聞いてあげた。
話を聞く前にすでにすっきりした顔してたけど。

あの次の日のカノジョのように。

実は俺は知っていた。

カノジョが好きになったのは、うちの兄貴だって。
言えるわけなかったけど。月曜は必ず大学に行く。
家からじゃないけど。

いつもバイクだから雨の日くらいしか歩かない。
女をとっかえひっかえ。

そして水色の傘。

あの話を聞いた次の日には、すっきりした顔してて、何聞いてもはぐらかされて。

しかも兄貴もいつも心此処にあらずだって顔してたくせに、水曜には元気になりやがって。
なんだって言うんだ？

何があっただよ。

誰も教えてはくれやしない。

「全くどいつもこいつも…」

「何かあったの？」

独り言に突っ込まれ、体がビクンとする。
弾けるような笑い声が当たりに響く。

「驚きすぎだよー。」

笑いやまないのはカノジョだった。
たまたま本屋に漫画を立ち読み来た。
いつもなら誰も会わないはずなのに。

「何してんの？」

俺的を得ない質問にキョトンとしながらカノジョは答える。

「本買いにきたんだよ。
何かおかしかった？」

カノジョはとびきりの笑顔を向けてきて、俺は不覚にも顔を赤らめそうになった。

「休みの日に本屋で人に会ったことなかったから。
驚いたの。」

言い訳がましく説明すると、カノジョは納得してくれたようだった。

なぜか2人で店内から出て、お腹がすいたというカノジョと近くのファーストフード店に入る。「テイクアウトにしない？
今日暖かいからさ、公園で食べようよ！！」

カノジョは勝手に決めてしまう。
まあ反論はないんだけど。

気が付くといつもカノジョのペース。
からかったのだってあの日くらい。

分かっている、自分の気持ちくらい。

好きなんだよ、カノジョのことが。

「あのさー…」

意を決して言葉にする。

「ん？なあに？」

ハンバーガーにかぶりつくカノジョに向かって。想い口から出してみる。

「俺、お前のこと好きなんだ。」

身勝手な日曜日（後書き）

完結しました。恋をすることでひとつ大人になる姿を描きたく書きました。ここまで読んでくれて有難うございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0733c/>

シュガーなエブリディ

2010年10月9日02時56分発行